ガリレオの残酷な異端審問所審査の話はよく知られている。教皇の呼び出しがフィレンツェにいるガリレオに届いたとき、ガリレオは重い病気で寝込んでいた。医療証明書には、ガリレオのローマへの移動は命に係わるということが記されていた。それにもかかわらず、教皇はもしガリレオが自ら進んでローマに来ないならば、鎖につないででも来させると脅した。フィレンツェの公爵は担架を与えて、ガリレオは1633年の寒い2月にはるばるローマまで運ばれた。その裁判は専門的事項、さかのぼること1616年にベラルミーノ枢機卿に言われたり言われなかったりしたこと、そしてコペルニクスの原理に対する教皇の不満をどれだけはっきりとガリレオが知っているかに注目した。彼の発言の正しさを確かめるために、実際にはやられていないが拷問によって脅された。6月16日に記録された教皇の評決は考えられるすべての評決のなかで最も屈辱的なものであった。教皇は「天文対話」が訂正されるまで発禁にするだけでよかったし、自己処罰と自宅監禁に処するだけでよかったかもしれない。しかし実際は、代わりに、「天文対話」は完全に禁止され、ガリレオは公の公式な取り消し宣言をさせられ、無期限で投獄された。6月22日の水曜日の朝、ガリレオは法廷の前にひざまづき、従順に次のように言った・・・